Network D

The Japan Society of Archives Institutions Kinki District Branch Bulletin
全史料協近畿部会会報デジタル版
No.90
2025.3.17 ONLINE ISSN 2433-3204

全史料協近畿部会第 172 回例会報告

日時：2024 年（令和 6）9 月 28 日（土）
会場：龍谷大学　深草キャンパス

テーマ：アーキビストと未来へ繋ぐ「未来へ紡ぐ深草の記憶」

若林正博（京都府立京都学・歴彩館・全史料協近畿部会運営委員）

全史料協近畿部会第 1 72 回例会は、標記タイトルで令和 6 年(2024)9 月 28 日に龍谷大学深草キャンパスで開催されました。本例会は「深草地域の文化『保存・継承・創造』プロジェクト実行委員会」（以下、深草アーカイブ）との共催でした。深草アーカイブが、伏見区民をはじめとする一般参加者の募集も行ったこともあり、アーカイブズ関係者以外の参加が多い例会となりました。

事前に多数の一般参加者が見込まれていたため、報告に先立って「全史料協の紹介」という時間が設定され、私から全史料協はもとよりアーカイブズ、公文書館、認証アーキビストのことなどを一般参加の方に説明しました。続いて、深草アーカイブ実行委員会の只友景士氏（龍谷大学政策学部教授）から「深草アーカイブについて」というタイトルで報告をいただきました。2021 年に行政（伏見区深草支所）主導で、地域の歴史に関心のある方々を集め、地元大学教授を実行委員長に活動が始まったこと、現在は行政から自立して３年目を迎えていることなどの会の歩みが説明されました。そして、市民による地域の写真資料をアーカイブする深草アーカイブの副産物として、様々なバックグラウンドを持つ地域の人々の絆や学生とのつながりが強まったことなどが紹介され、アーカイブズにとどまらない地域社会への波及効果が紹介されました。２人目に報告をされた鵜飼実幸氏からは「深草アーカ

イブズの活用と実践」と題して、実行委員会での資料選考の様子や資料の活用、一般への普及啓発活動などの報告をいただきました。

報告の後、全史料協関係者からのコメントを挟み、質疑応答・討議に移りました。全史料協関係者からは深草アーカイブへ古写真の収集方法やメタデータ付与について、一般参加者からは全史料協関係者へ古写真を残すことの意義についての質問など、様々な立場の間で意見が交わされました。討議は、在野におけるアーカイブズ活動の重要性について、井口和起京都学・歴彩館顧問による「アーカイブズはみんなのもの」という言葉で締めくくられ、市民や市民活動とアーカイブ、アーキビストの連携が深められる有意義な機会となりました。

例会参加記

久保庭萌（尼崎市立歴史博物館あまがさきアーカイブズ）

令和６年（2024）9 月 28 日に開催された、全史料協近畿部会第 172 回例会「アーキビストと未来へ繋ぐ 「未来へ紡ぐ深草の記憶」」は、近畿部会初の試みとして、深草地域の文化「保存・継承・創造」プロジェ クト実行委員会（以下、「深草アーカイブ実行委員会」）と共催で、伏見区の市民講座「伏見連続講座」も兼ねた催しとなった。会場には、市民の方々が多く参加されており、いつもの例会とは違う雰囲気のなか、会がスタートした。

最初に、司会の京都府立京都学・歴彩館の若林正博氏より全史料協の紹介とアーカイブズとは何かという概要説明があり、公文書からも地域の歴史がわかることを地域住民にとって身近な例を挙げて紹介された。市民講座として参加された方の多くが、「アーカイブズ」そのものよりも、深草の歴史や深草アーカイブについて興味をお持ちの方々だったかと思うが、そういった方々にアーカイブズを宣伝（？）する良い機会ともなったのではないだろうか。

そのあとは、深草アーカイブ実行委員会より深草アーカイブについて２本の報告があった。「深草アーカイブ」は、令和４年（2022）に旧深草町町制 100 周年を記念して出来たデジタルアーカイブで、ジャンル・エリア・年代の３つのカテゴリと１８つのストーリーで構

成されており、カテゴリごとに写真を見ることができる。これらの写真は市民より集めたもので、収集した 1,400 枚の写真のうち深草アーカイブ実行委員会が選定した 700 枚が「深草アーカイブ」に掲載されている。

報告①「深草アーカイブが出来るまでと出来てから」では、龍谷大学の只友景士氏（深草アーカイブ実行委員会委員長）より深草アーカイブの開設経緯について報告があった。只友氏によると、深草アーカイブができる契機と なったのが①町制 100 周年、②地元の大学、③地域の取り組み、ということで、③については、もともと伏見区役所まちづくり推進担当が区民活動支援事業を行なっており、市民団体のネットワークと自治体とは顔のわかる関係性を構築していた。そのネットワークに声をかけて実現したのが、今回の 100 周年事業だということである。実際に深草アーカイブ実行委員会の顔ぶれを見ると、「鴨川運河会議」「深草郷神輿保存会」「深草を語る会」「深草古絵図プロジェクト」「深草チンチン電車の会」「伏見城研究会」など多彩な市民 団体が参加していることがわかる。伏見区役所の職員が、日頃の市民団体の活動とそこで活動している人々を知っていることがこのプロジェクトを成功させる上で大きな要因になっている。

また、大学との連携も注目すべき点である。深草にキャンパスのある龍谷大学は、深草アーカイブ開設以前から地域に根差した活動を行っていたということで、只友氏が実行委員会に参加したのは自然の成り行きだったそうだ。只友氏のほか、龍谷大学の学生も、ゼミの授業で深草アーカイブの写真を活用して「まち歩きすごろく」や「今昔カルタ」を作成し、小学校に出張授業に行っている。さらに、教員に向けた地域学習も行なうなど、次世代に地域の歴史を伝えるための活動を展開している。近年の学習指導要領改訂により、博物館・公文書館の活用が特に謳われるようになり、アーカイブズと学校連携の機運が高まりつつある。さらに ICT の推進により学校でデジタルアーカイブを活用できる環境が整いつつある。こうした状況のなか、深草アーカイブと龍谷大学の取り組みは、どのようにして学校と連携していけば良いのかという一つの好事例となりうるだろう。

報告②「深草アーカイブの活用と実践」では、鴨川運河会議代表の鵜飼実幸氏（深草アーカイブ実行委員会副委員長）より深草アーカイブの写真整理作業と写真の活用について報

告があった。鵜飼氏は、深草アーカイブ開設に際して収集した写真のうちアーカイブに掲載する写真の選定や、写真に情報を付与する作業をボランティアで担っているメンバーのひとりである。集まった写真の年代や場所の比定するために、何枚もの写真を見比べ、現在の街の様子なども調べながら情報を特定していくという。さらに、写真の情報を読み込んでいくことで、意外な発見に至ることもある。具体的な例として挙げておられたのが、旧深草町役場の写真で、そこに写っていた役場の看板が実は地元の小学校の資料室にあることを発見し、支所で 展示されたということである。１枚の写真から、他の資料の掘り起こしにつながった事例である。鵜飼氏のお話を聞いていると、本当に心から楽しんで深草アーカイブの取り組みに参加している様子がうかがえる。最後のディスカッションでも鵜飼氏はこうした活動を「好きでやっているだけ」だと述べられていたが、市民の方々が主体となって取り組むにあたってはやはりこの「好き」「楽しい」「興味が湧く」というポジティブな気持ちをどう後押しするかが事業の運営・継続にとってポイントになると思われる。

以上つらつらと述べてきたが、深草アーカイブの最大の特徴は、「地域に根ざしたコンテンツ」という点にあると思う。自治体・市民・大学が協働でコンテンツを育て、さらにそのコンテンツを核に事業を展開することで、深草アーカイブは世代や立場を超えて地域の歴史を共有するツールとして機能している。なお、欲を言えば、今回の例会では、実行委員会のアドバイザーとしての若林氏の活動についてあまりお話がなかったのだが、おそらく事業を進める上で、様々なアドバイスやサポートをされていたのではないかと推測する。こうした事業にアーキビストがどのような立ち位置で携わっておられたのか、その辺りのことをもう少し詳しく掘り下げていただけるとなお良かったかと思うので、ぜひ再度のご報告を期待したい。